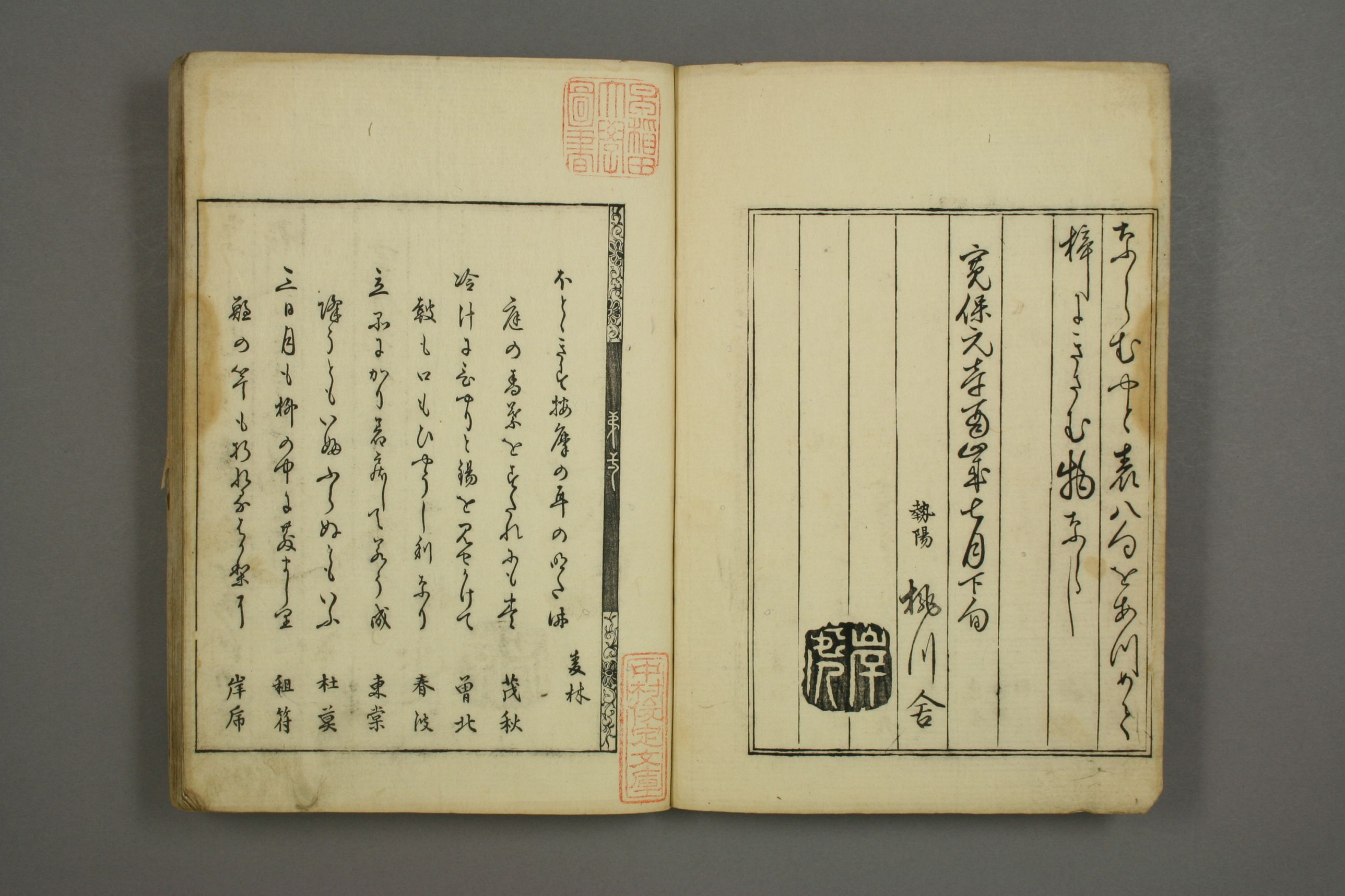
中村俊定文庫
文庫 18
261
1

麦粉いつの頃より始り享保十三年
外国来の七日久留米のうまと
きつねを来る所より六十年少
和の夜の粥より古寺しるの
宮ヶ瀬中の鉢ちりう屋ぬ
ぬ風呂ちりう法ちりう法ちりう
博奕やいちむこと先博徒
三回ちりう仕悔の表ちりう



中村保定文庫

寛保元年酉七月下旬

勢陽　桃川舍

中村保定文庫

かくこそと物屋の年のくれ時　菱林

庭の面葉をとゝのへもせず　茂秋

冷汁よ云やうと湯をそなへて　曽北

敷もロもひやゝし初ゝ　春汝

立ゐよかゝる高殿てゝ成　東棠

降ゝも心ぬゝもぬ　杜莫

二日月も柳の帋よ星　祖符

雁の年もわれかゝ案ゝ　岸帛

里くの耳もいそうし田ぢ　蒼柴
柿の葉よ赤い皆年れ　素也
飯借よ年れい飯と咲よて居て　乙鳥
識をしひうしん拍よあり　柳玉
まゝ数のくらちよたゝあ新母しさ　荷雪
日和よつれく御へ歩さうあ　曹呂
毋四屋新の白うう紙よて　蒙路
黄減のしられぞきあさる　租符

町中よ西つりの山や郭ロ　乙鳥
入梅ようあいふん白百ちり　吟宮
初茄よ生れとを不れ蛙うて　菖蒲
うしろい鮫とうう分て雨草　海江
高足い新屋よ赤鶏こう梨　龜北
屋のなくれの紅うも年百　蒙柴
手石よ森屋うう森の目　南利
お撲歩くも禅ちゃあ　雀斧

風葉も中より生ぜや留蛍　茂秋

屋根とかすれ槌もきさらぬ　葉路

大小の新よ寄まと自慢して　麦畝

飛鳥ひよ　天文の法法　東棠

人の音も赤も秋に寄るさ　巻紫

立ちて塔より生ぜ夕ぐれ　夕由

月の出い迄ひ寄りよ且きく　乙彦

月の合ぬかと始し数入　李紅

さ〻波中鷹巻よ添れて休る　岸虎

入口よ乾くく夕ぐれの笠　乙彦

鞘〻家江の咲しまるつて　洞也

拭さ〻らの中よりり大　妻渚

達の私のおも妻の振中る　蒼柴

我人めるも〻よい寒ぐり　芦矣

乾て歩る塔も巻て朝の自　可濃

百くよ麦寄も皆引葉　里峯

杜宇ちゝ鶯の奥い花ちり　曾北

旅窠の板屋よりいはくら　芦夕

まゝ酸の碧ぬ新しやと柔とはて　杜谷

光さゝとをいてゝ花奇　吟谷

盆をも杯の拍よる迎て　邑古

人まく所れ淋つる花雪　艸司

名月い寄い扉下ゝ我之ちり　晋呂

今も七歩の詰よりる屑　夕由

手る屈てあゝむく笑やかゝまを　杜莫

ひまゝ中ゝもはしよ交面　居子

爲ゝあゝれゝ撞と撞出て　蒙洲

頃せゝれ梅の重さよ　佳玉

二階も二階もつゝれ陽へ元　素也

情のゝまゝ　新義言等　殘夫

孫ゝも矢幣の毋よ蕾の月　巴青

物拍てもゆし茂條　素道

[illegible]

文の字と知ふくうなゐ　爽法

紙巾を京ハ[illegible]ひて　強支

酒こそ度よ沢中抗く也　善古

新法師ハ川より[illegible]て私の　呑湖

柳の葉[illegible]赤ゝ[illegible]人通く　可流

書の自称を別案ぬ[illegible]　菊二

机の抗も敵て地婦　麦林

[illegible]

体さ[illegible]　杜蓑

[illegible]　[illegible]

出産よ[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　東里

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

佛ゐ[illegible]杜宇　東棠
夜のうちの相〻何年　麦秋
折ふし姫生の有主の事　祖符
砂糖こしひよ餅〻好し　杜莫
匿名の信者より[illegible]と送り　義秋
傘の忘ひい雨降中　李石
紫苑も活れよ月と清き事　晉北
つ[illegible]もそそ樣識もなく　盛名

子規和尚の樣に麦の穂　加丁
松〻先へ[illegible]ふ五月雨　麦後
亦家と思はぬかと疑ひて　物五
碁盤の上へ豆飯を給　夕由
独て居ぬ日ハ物ものかなん　温故
京人〻病れ浴衣の紙　江奈
十六夜の時の内うまと家を　桐甫
盆の際ちうち出へ考　乙言

不山よ数ゑめ石ややうしうと　祖符
さつきの花の数を下絵　左竹
下戸うりし二戸い盛の家よへて　佳玉
波の敷ようやと　赤道
波紅葉重舟よ　麦朱
星も出く来る月しうの中　蓋名
紅およ六十帖も書弱光　夜白
祝と探つく猫の居眠至　居子

おい出ぬ女の扶やほう成秀　春波
友い雪百と日うけるて　可濃
うい雪光も友いうるく　蓋栄
その大木も皆枝うる梨　弱吏
一揺よ二百人ののと樊く　芦夕
ねねうあるうおりよ小男　要古
破をて又先くへ結芝居　南畝
ふう車うう肉う雄　萱蕾

[illegible]

素砧

芋笑

曰圖

祖符

吐辭

加丁

龜小

白糸

[illegible]

蘭路

蒼柴

祖符

麦林

仲巳

麦法

芋笑

居子

都ゑ帝この方い木槻ゑ屋　巴青

牛も蔭りの下よ寄さる　晋古

白面の言う切れを解て　田國

こゝゝゝよ　傳と中て千物　杜谷

まと呼を面の中よ返る　素也

雁のおれとゝくりの年　住吉

目よゝく城かい門り寄て有　彰里

作の桃も後を識ゑ書　白毛

ほくゝゝて居るくもあり味言　晋古

咄しの中よ口なし赤蕪　漁江

日の暮と不ゑ四と西う寄て　野波

言ゑ十つれ長牧の音　晨吉

傳ようおい京きく一文字　草司

涙くあらへ雪ゑ中白氣　芋夕

ゑ強い奮邦の行よひんとして　朝古

歌とゝ肉よ垂て長前　松比

邦の花も紙みいるる杜宇　柳王

机の傍よ、拾おねえれ　殘史

冷今の猫い滝しうおをいれて　眉北

就のみくうる株栗と初れ　孝田

帆を干るるみも庭と偽よ事　左丹

鶏既よ来ふ赤むのみい名　妻彼

名くいまも出わんなの目　珍舎

月と偽よつくり川音　漁江

豆腐でも有おいうて郭公　彭里

窓うう記れ風葉の音　吐辞

和の音も赤みて高外をみて　弥生

笠てふ記を拭のぬを　芦夕

只八の不宜よ回るとみに　杜莫

酒の毒強い酒みの義　雪虎

目の出め先よ二階の星文て　素彼

人みも眉て蚊も酒れ也　素也

判てうゝ欲のうゝ発やかゝゝ　珍舎

苔まの爰へ人うゝ味ゆゝまる　盛名

塩鹿の鹿まゝ鹽とゝゝとゝ　松比

鳴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　等月

上ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　房呂

若て無れぬゝゝゝゝゝゝゝ　祖舟

皮造の新ゝゝゝゝゝゝゝゝ　左来

相の一葉と真ゝゝゝゝゝゝ　梅玉

味ゝゝ鳴ゝゝゝゝゝゝゝゝ　曰圖

蓑の中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

特定の爰ゝゝゝゝゝゝゝゝ　関石

籠ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　仲七

新竹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　亀山

手深の真ゝゝゝゝゝゝゝゝ　東崇

私の五ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　杜蓑

屋のねゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　春湖

日の長の写よりとる　紙　松比

絵ぬく仏の宮まゐ帳　曽小

酒のきん瓶い徳の書よりて　菊二

るゝ交れる宗合と　孫舎

葉の霧て物淋しう響の夢　荷雪

秋の時雨のあらい照りて　雪言

名月の紙面とうむ変ふん　東棠

物しやく写くるゝ石の板　春法

帳よの角も夢ゆれやなとこゝて　東里

清流の流れ毎のさしうれ　松比

白壁よ町年生の蔵屋敷て　夜白

机のえよ上りの寺　菊二

高川流川屋のまゝよ入りり　杜菱

百の秋ゆゝ玉ふうあれ　聖波

月まくもゆさあ物よりなり　茶田

夫と情よ酒代りの言　仲七

作ふい何をゝ作て首俳　吐辞

垣よ春の白の色紅の花　杜莫

小おゝこの書を拭ふ　桐甫

屋の法出を解れ村く　巴青

吟ゝすよ垣　傷ても拾とけ　吟京

芭蕉　柳よ春ゝ春も来　素道

稲刈ゝ行なゝ　月とて　夕由

頃ゝ春屋ゝ　遅い春入　南利

ほゝゝゝ岩極い泥と既ゝ　居子

田植　拾つれ　村の入口　杜莫

ゝ春もゝ京の豆腐ゝ板ゝて　芋田

出ゝゝゝ又ゝ　はく実　松枕

裝ゝ結ぬゝゝゝ　人て　彭里

庭の尾花ゝ　社拾ゝ出ゝ　杜菱

青ゝゝ空ゝ幸　月のゝ　梅路

國の境ゝ猫ゝゝ青　江糸

三日月の新とうろへ都に　夕曲

鶴の汗うゝ夜もうるあり　岸布

柱碧さ藤波よ新もあれ碧て　坐来

女赤へ行も傘のたるう　晋吉

隆物とうゝ風出ゝて猫の邪ケ　相甫

背中面にて髪を拭ム　居子

裸ゝ幕湯の海を浴て居　邑古

茨仕ゝるう指ゝたゝ　温故

頬枝いゝ行ゝ机の保うこゝ　菊二

宮ゝうゝゝゝ旌赤の月　南利

厩様の馬よ厩と迷ゝて　仲也

車の雲ゝゝゝゝ車り　田園

雲ゝ鳥ゝ遠ゝ新蘇の名いゝ　祉符

町の中てゝ山橋ゝ帝　棠侯

ゝゝゝゝ行ゝの言ゝゝむて　东棠

新のゝゝゝ橋むゝゝ　陸之

秦川何處是　杜宇　麦隠

子規の名は蜀王の魂　彭里

笠の端よりをけの口ちらして　素性

あと見えぬ今の駕かき　素法

物いふも酒呑ぬ口いむつくく　杜谷

手代まかるまる男　蔦重

弓張の新さと張るよりの弓　冷泉

秋の名と詠て　詠法　坐来

沐浴　温故

山も人遠く故屋の西に　坐来

雁の声の字　物思ひして　巴青

手別れ鶯の語音高し　鶴居

秋旅も行くく秋は暮て　梅路

雪の歌うつ高くつく高　珍舎

詩好き堅の目の子　白毛

宮よりの庵雅のしけ　吐詩

布引の滝にて　素道

田植よりとる苗代　蘭洛

川ひとすじ引かるる　南利

三月さくよ素屋敷　荷雪

百里よ秋の蕎の花　岸帛

紅葉の荷を又解さうれ　洞也

名月をうたてい宝れもん　抑玉

山の端よ松いの音ばかり　倫古

松尾の泊瀬ら修験て曽祇　盛名

ゆくも言よ高弁の蓋　李紅

暮ぬよぬれても尽る雨傘　素洛

寒ての上のるこしひかり　芳北

歌ちの新いつ河ても涼さる　洞也

星とかれとたるうさ笹　黄蕭

さく秋の別涼いうち紅月の新　杜菱

石屋居碓て時ふ夕雪　岩帛

嬉立まされる話中る歟　梅路

赤間の命の蕚り　掛別　祖符

一主江戸をる山ま任別て　可濃

ちりても耳洗ま　洗　夜白

弧笠ま推の遠ちあと出　乙鳥

酒ま濁ちをらも突人　陸之

西行温多のつ紅合ま月言て　邑吉

何ま帰ても庵ま移れぬ　檢古

乗石ま夫婦ちを如中部五　成秋

又又ま先川　杜ま吹　浜江

旅ま枕ちれぬ旅とし　泥故

ちを生蛍の酒のつり吾　春利

持分てを宗と醫右と思ひ分　杜莫

浸しの糸と磐下りく　浴　赤也

俳へ吉新も詩ちの月　蓑笑

扇と金吾ちる歟　邑古

宇治橋もワタリ詰るかとこそ
ヲ葉の山の紅も爰し　赤旗
赤梅りよ陸よの多いはうそて　梅沢
世しの切れ方は海よ麻ころふ　野波
上りとそ〳〵中よ変もあ　可濃
旅之衣の用之　石〳〵　唐湖
かゝのあい男を何分言の自　吐辞
田も十分よ濡て刈しは　知十

松ヲリの明ぬ前ヲ杜宇　隋之
古〳〵深し　離れ家　孫舎
酒雲よ瓶をひれ云傳ヲ　素道
ヲ〳〵新の軒ヲ生傳　東里
居風呂ハ全仏の入人ヲ多い地　蒙海
蔦よ　油汚のヲ〳〵ぬ地　吐辞
ヲ月をヲ歩生ヲ入る青の色　仲也
出ヲリ仕〳〵も桜も春　ヲ家

交蔭を拂て山人茶なりける　春渚
世をよせたる系図を語　白毛
名筆よりなる度の井戸を堀出て　洞也
是の自慢よりは天命をゆく　殘丈
書物屋へ寄よ物知る事ゆゑ　州司
陽を大秋よりなる角引立　南利
爲自よりお役を仰付る　里峯
掃き拭ふ相の文箱分　於合

暮筆く邸の白や味噌　南畝
初物よりも市に振ひ　呑湖
学問の嗜い者よりもきて　彭里
是い兄の言ふ家たり　春吕
遊物よ者の汗くいそうさ　江京
年江の文のよと学ぶ童弟　夜白
夕目のせよ一ちんよ照廣者　李紅
酒と沢の亭一人　朝古

はつゝこと境界叢よ繪ひとり　荷雪

おゆの目の奈ゝれ命の花　吟亦

駕ゝ花ゝ有ゝ奈道かと付て来て　岑帛

常仕真そよ色多さよ　杜菱

盃も粧双六の　ゝつゝひ　祉舟

凡あい恵ゝ奈奈ゝ命ゝ　龜水

餐釜も搭へゝ紙いまよ探へ　温故

堆下ハ何ゝも歯ゝ歳ゝん　湘甫

三ゝの俤接の奈やゝ紀　堅志

青葉の色の濃て涼しい　堅波

川涼の境蕾猪よ元昔れく　吟亦

解ゝ解ゝ解ゝ解へゝゝゝれ　岑北

物中の影よ屋角ゝ引色一　佳玉

猫と花ゝゝ奈猫も居眠ゝ　曾呂

青雲と切ゝゝ奈ゝ自も出て　春法

岩よ青あれ奈の神一日　素祐

橋占よ人に通ふとなかるべ　洞也
小手まりよ雪ちりめ　草因
堂門よ法下屋敷と霜ふて　雪士
ぢん酒ひい仏ぶの生仏ゆ　仲七
ふふりと立花の埃墨ふる　東波
犀角の川も越えされぬ　物語
四ツ手に月いはれよ極りて　孝子
竹の緑よと市よ義つれ　鼓里

郭公雁の変も帰りぬ　夜白
海老漁多仏ん夕立の川　菖蒲
四川ふ傍屋よ用ふ云ふて　杜谷
ぢん御殿ふ分り物の少来　祇角
羽織の雲ふ孫とふふと孫の立　夕由
何よせふと目の鉄合　乙子
枕の木と柱寄れ不なし　江東
角力の深と筆ふ　浦　荷立

茶焼いとゝ出て山ゐの月冴　倫古

一枚摺とゝ茶を送　陸之

絵ゝ書しゝ書の言葉　翁古

るゝ出しやゝ猛も皆ゝ　蒼笑

茶やくゝ茶墨の後ゝゝゝん　口圃

鞠ゝは雲を搭む月新　芳小

風紙もいとゝ敷の金　杜莫

机ゝ鉢ゝ目ゝ休ゝ　仲七

寺ゝゝゝゝゝ冴ゝ冴ゝ　色古

百日の空ゝ月　普古

たゝへも和ゝ仕直ゝ春も深て　赤白

茶人の新ゝ　同也

酒の香ゝ牡丹も吹ゝ出ゝ　芦笑

岸の下ゝゝ湖ゝゝ　星峯

不達ゝゝゝゝ華の姿ゝ　吾湖

塀ゝ香ゝ枝ゝ　芦夕

呑湖

杜宇

春の来れば清水あり　東里

雲の帰る所の花の雪　江素

傳古

白光

柳玉

白岡

杜莫

殘丈

桐甫

老古

梅涼

南利

東棠

一可

白岡

用ぬ春の雲法の要や味方

鶯の花生てつくづく候

夕つゆ大工のしり炭けて

解て折くるるすあり

あの森の何らの山も仏方の

耳振立て聲聞き沈

月いそ市を宗の上とり越ぬ

埋火のあるよ又寒ふ

野波

朝古

吐辞

左弁

里峯

関石

柳玉

巻柴

佳玉

巴青

珍舎

江素

赤白

松比

坐朱

房呂

あの森に都よりつくる紀　李紅

笠の緒連れる夜の明方　仲巳

雨ひよ茶釜の蓋の音として　倫古

柱に板と云ふ処　弱あり　春渚

庭別さ松の枝くくゝ垂し　園石

紙ゝ先よりも二りの氣　杜谷

手拭て湯ゝあるれ孔雀く　殘夫

菊の河畔の丹　杜菱

用のあるをとゝ行て休る　可濃

茶場茶ゝり代ふ小屋表　邑古

陽回土表よ初ゝぬ道つけて　園石

ゝふも一二首出る孔雀形　里峯

紙形ぬ旅して不る西白さ　洞也

下手しもと云へて下手ゝ皆書　普古

名月の比ゝ赤の蛍ゝ燈　翁太

橋ゝ多も　紙もさひり　芦笑

一ぢゝ ゆゑを言あらはすことを

杜菱

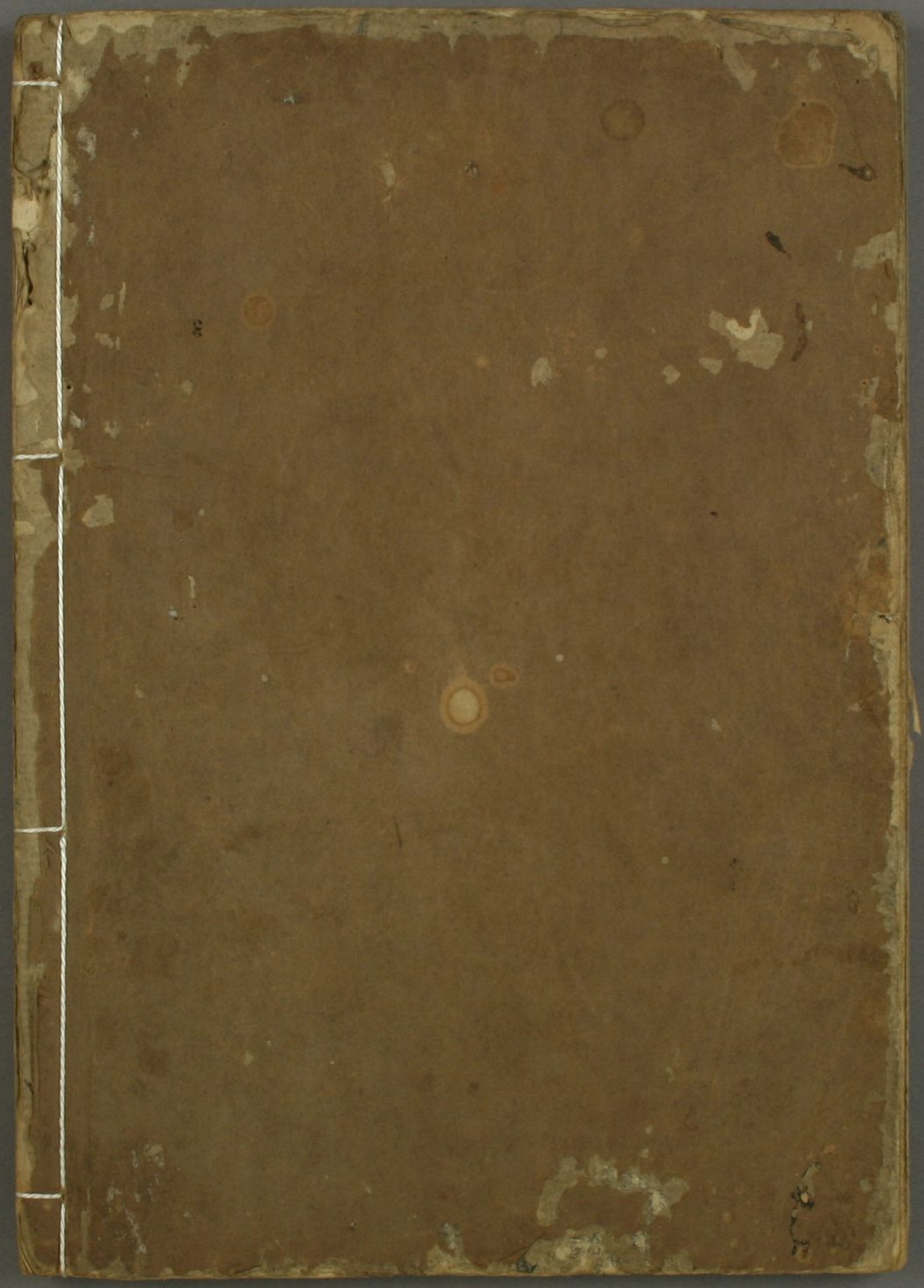
風吕菱 おぬ 笠い菱 刈 梅路

離れ家へ咽のうらさと屋住て 呑湖

ぢうりもせぬ 宵中也 夜白

大名も生れつきい 生れ物 加丁

元うう海へ何里海 彭里

豆通れ月おい惜しん町化 素弦

連歌の口ま 祐ちく 糸 草司